

# 京鹿子

平成二十七年四月二日発行  
通巻一〇八八号(毎月一回一日発行)



4月号

豊 田 都 峰

叡林集 その四



雪のくるけはひに藁屋の灯のにほふ  
雪もやひもつれれほどけの杉の里  
茅 葺 郷 盆 地 は 雪 の 壺 め け る  
雪 明 かり ひ く く も ら し て 茅 葺 家  
雪 し ぎ る 音 に ま た し て 暮 れ 急 ぐ  
少 し づ っ 風 の こ ぼ し て 春 浅 し

雲触るる木末あたりに春探す  
春浅き林は風の棲むところ  
嶺もとほくたひらな風のいぬふぐり  
風花や藪の日ぐれのさやぎなく  
風花のかすれに木末の夕ごろ  
橋越えて隣の村へ日脚伸ぶ  
ついそこといふそこにまで日脚伸ぶ  
丘下る径の隈なる冬董



— 近 詠 —

鈴鹿 仁

### 春野歩す

磯 あそび 風の 耳うち 相槌す

春野歩す 雲の 行方は 雲まかせ

「進行よし」 指さす 先の 春山河

— 追懐 — (その八)

劍豪は 長者の 血筋 初土筆

〔平成四年作〕  
〔柳生の里〕

劍制す 柳生累代 眠る 春

〔平成四年作〕  
〔柳生の里〕



— 近 詠 —

和田 照海

ポインセチア

伏線をたぐりあぐねてポインセチア  
一島をがんじがらめに牡蠣筏  
泊船に投錨音や冬至風呂  
海鼠食ひ連立方程式解けず  
吾妹子といふ間柄餅焦がす

## 秀華採集

二礼とな社家の軒端の初がらす

鈴鹿 呂仁

正式参拝の仕方は「二礼」に始まる。なぜ一礼ではないのか。「とな」の措辞の軽さもよく、疑問は真理につながるが、「社家の軒端の初がらす」に言わせるところが俳句のひとつの表現がうかがえてよい。

笹鳴や一隅囲ふ斎縄

竹内 久子

初山河飛び立つときは風に向かひ

大谷 茂樹

春まだ浅く寒さに身心のひきしまる頃か、社の一隅の「斎縄」と響き合うものがある。後句は浮力を呼ぶ形を提出、「初山河」の中とするのがよい。



神麓集

早春譜

藤岡紫水

竹百幹風をしぼりて寒に入る  
余寒なほ円空佛の木目鉈目  
春寒しいづくへ置かん喪のころ  
水際打つ波が奏でる早春譜  
笹撥ねてはねて雪解の風わたる

春待つ崎

松本鷹根

枯れ色は遠嶺に委ね犇めく墓  
鳥辺野に鴉と寒を眩しめり  
薄氷に時空委ぬる巔に着く  
風花に出島灯台影伸ばす  
諸手あげ春待つ崎の大樫

松田都青

思ひ込む癖の始まり除夜の鐘  
身の錆を落す暇なく師走来る  
着ぶくれて論語老子に讀みふける  
女子寮の灯が消えてゆく雪催  
憂国論やたらに書きし日記果つ

野風呂松

北川孝子

膝小僧撫でて叩いて年詰まる  
ガラス戸のわが顔磨く小つもごり  
元朝の白雪来し方透きとほる  
野風呂松直ぐなる御慶の日和かな  
粥柱己を恃むぬくみなる

玉手箱

丸井巴水

除夜の鐘数へて折れる撞木町  
初声は雄鶏にして息ながし  
朱の椀に丸餅機嫌よく浸かる  
ひもじさに鳴くか初鳩羅生門  
玉手箱開けてしまつた初鏡

塩貝朱千

雪の野に一步をしるす五年日記  
魔笛きく真白き夜に窓打つ雪  
寒ざくら成さねば背より夕昏れる  
初鏡自惚れたくてココシヤネル  
紅の袖娘はきりきりと弓始





# 京鹿子集

## 豊田都峰選

二礼とな社家の軒端の初がらす

人日や早や顔を出す巻かれぐせ

節節の数へ切れずにごまめ囁む

煮凝りや封じ込めたる絵空事

笹鳴や一隅困ふ斎縄

神木の走り根太し霜の花

一願の墨の匂ひや実南天

式台にひさぐ小物や郁子熟るる

初山河飛び立つときは風に向かひ

初釜やつくつく匂ふ青畳

京都 鈴鹿 呂仁

竹内 久子

大谷 茂樹

正午指す時計塔より風花す

山眠る鳥の声など飲み込んで

砂漠町足音もなく冬の使者

葉牡丹の渦多ければ色増せり

寒桜人の温もり感じつつ

初釜や利休七則心して

雪もなくアメリカの空灰色に

十二月地球の異変芝青青

大雪や遙かな日本荒れ模様

温暖の日本の雪掻きテレビ風景

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子



競り声のたまにかすれて河豚競らる 札幌 野村 鞆枝

滑つては黄色い声の雪の道

招かざる客の居据り寝正月

迷ひつつ五年日記あがなへり

雪囲する軒先の高さかな 酒田 藤波 松山

虎落笛さらに激しく夜明前

除雪車の音に目覚ます午前四時

雪搔きの汗も健康長寿かな

心より健康感謝で越年す 渋川 東 秋茄子

煮凝りは母の背より学び造る

嫁も来て女正月盛り上り

七草に健康祈り夫婦枕

健康をギフトとなしてクリスマス さいたま 神田 惣介

錦秋の中行く船や老夫婦

酒蔵を見上げて錦秋十石船

冬空に黒き切り絵や東寺の塔

噴火後の山裾はいま帰り花 千葉 伊藤 希眸

湿原の赫赫と枯れうすづけり

紅螺あかにしの蓋は開かず師走くる

女院陵に佇つさめざめと小春の日

人死んで葱の切り口ひそと伸ぶ

まな板の荒野の果てに唐辛子 直江 裕子

元旦の計は上手に死ぬること

マフラーを巻いて疑ひ深くぬる

先駆けて枯れ葉飛び込むビルのドア

北風や駅の灯りにほつとする

風乗せる駐輪場の木の葉かな

追悼の任侠シネマ年暮るる

読初は「蝸の記」や時計鳴る

寒燈や塾の講師の淡き影

喧嘩独楽もうすぐ兄の七回忌

三角に寄りたる日差籠の玉

半世紀経つても学生漱石忌

寒弾く女優のせりふ炭坑話

初雪や渋谷交叉のスマホの子

雪の葬片耳落すイヤリング

人日やさらりと転職する娘

しみじみと母に重なる初鏡

書くほどに筆の強弱寒の入り

三日はや掃除機くるりくるりかな

床にないしよばなしを攫はれる

床を枕にいつか深眠り

風呂敷につつむ挨拶年の暮

折り紙に祈りを込めし年の暮 船橋 元橋 孝子

布川 孝子

高野 春子

松戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

船橋 元橋 孝子

死してなほ箸を逃るる海鼠かな  
内情ば探りよるとね隙間風

金子 正道

寒茜震度三とて身を構へ  
好々爺ちらりほらりと松の内  
月冴えて衣流したり余呉の湖

高島正比古

ぞろぞろと二階へあがる年忘れ  
肩組んで攻めくる濤や冬銀河

東京 野中 圭子

冬の鴟またぎは風を知り尽し  
落ちきらぬ話寄せ鍋の蓋開ける

黄落や大樹一本そそり立つ  
立止まる辻に北風容赦なく

忘年会唄の練習一人の間

冬晴れて投票の列絶間なく

縁河豚の肝に収めし自己主張  
縁小春黒猫せはしく爪を研ぐ  
年忘れ王子稲荷の笑顔みる

神田美千留

落ち葉踏み遠ざかりゆく人の影  
チャイム鳴る夕暮れ空を冬の雁

丹羽 武正

公園のそこだけ寂と冬桜  
飛行音南へ落ちて冬木の芽

葱の味母のしつけの懐かしき  
ユネスコの吉報に湧き紙を漉く

岸上 道也

白山茶花彰子御陵に降りやまず  
照紅葉深山へつづく衣の音

児玉 有希

初空を翔ける夢もつ十五才  
水仙や暮れゆく海とともに暮れ

子溜りや空にでつかい喧嘩風

冬の百舌杉の一樹を守りをり  
神杉の秀に陽のわたる淑気かな

福島 照子

妙薬は十日夷の御神酒とす  
三世代目出度く揃ひ松飾り

中西 明子

若菜摘む政夫民子の恋の野に  
待春やつましき語彙を紡ぎつつ

中島悠美子

強風の宙にヒラリと出初め式  
七草粥孫にせがまれ早起きす

過ぎし年現に思ふ郷の梅

佇みて佗助よりも人しづか  
落葉焚く斜めうしろに駐在所

木枯を横ぎつてゆく子の翼

冬帽子ジヨークを軽く使ひ分け  
端つこの好きな男と温め酒

中村 三郎

今日何をせしか綿虫ついてくる